#### 識も変わってくるのでは

- ・ 新耐震導入当時は非線形解析という世界の最先端 技術を採用しているという自負があったが、その後大幅 な改善をしないまま年月を経ており、その間に欧米の基 準は大きな進歩をしている
- ・ 地震地域係数Zについても検証・再考の余地はある
- ・ 開発途上国での建築基準、規制制度の導入に当たっては、工学的な観点からの必要条件のみでなく、社会に受け入れられるかどうかという十分条件の検討が必要
- ・ 文化や歴史的背景、人の能力も含めた社会システム 全体と工学を繋げてゆくことが重要であり、日本も市街 地建築物法の時代から時間をかけてその繋がりをつち かって来た

#### シンポジウム終了にあたり

参加者アンケートではさらに詳細な説明や広範な地域事例等への要望が寄せられ、今回のテーマへの関心の高さが確認できた。集まった意見を委員会で討議し今後の活動に反映してゆきたいと考えている。

本シンポジウムのより詳細な報告は 日本建築センター発行のビ ルディングレターを参照されたい。



シンポジウム風景



主要論点の討論(右から、杉山氏、塩原氏、福山氏、五條氏、石山委員)

[松崎志津子/NPO都市計画・建築関連OVの会]

## 建築文化週間2017開催報告(本部企画)

#### 日本建築学会

#### 建築夜楽校2017

## シンポジウム「建築と『穴』」

10月13日(金)に建築会館ホールにて、建築夜楽校2017が開催された。「建築と『穴』」というテーマのもと、原広司氏(建築家、東京大学名誉教授)、江澤健一郎氏(フランス文学者、立教大学非常勤講師)を迎え、モデレーターとして平野が加わり活発な議論が繰り広げられた。

今回、『穴』というキーワードを取り上げたのは、昨年の夜楽校での 議論をより具体的な建築の制作論として発展させる目論見があったた めである。

\_

「はじめに、閉じた空間があった―と私は発想する。この閉じた空間に孔をうがつこと、それが即ち生であり、即ち建築することである。」

(原広司『境界論』『空間 <機能から様相へ>』岩波書店、1987年、p.164)

\_

原氏の有孔体理論にあるように、建築において穴(孔)とはもっとも基本的な存在である。原氏はモダニズム以降、世界を覆い尽くした均質空間の解体を試みるうえで、有孔体の概念を導入した。ここで穴は、一つの空間に他の空間群を接続し、そこからの交通を取り込むことによって(音、熱、光、人など)、空間の均質性を侵犯しそこに活力を生み出すものであった。つまり、一つの世界に他の世界を接続する存在としての穴である。

一方で、穴は切断的でもある。例えば、地面にぽっかりと空いた洞穴は、確かに外界と内界を接続している。しかし、洞穴の暗闇の向こうに広がっているであろう計り知れない何かが秘められた内界は、外界からは窺い知ることができないものとして退隠しながらも、我々の好奇心を掻き立てる。ここで穴は、外界から内界を接続すると同時に切断する、両義的な存在として描写できる。

昨年の夜楽校の議論で切断の哲学として取り上げられた、グレアム・ハーマンのオブジェクト指向存在論におけるオブジェクトのあり方は、 先述した穴の接続・切断性と通ずるように思われる。ハーマンのオブジェクト指向存在論において、全てのオブジェクトは他からのアクセスから切断されており、汲み尽くせないミステリアスなものとして退隠している。そのような切断の一方で、ハーマンは「魅惑」という概念を導入し、切断されているオブジェクト同士は魅惑によって関係していると論じている。

「(哲学は)存在するものにフロックコートを、数学的なフロックコートを 与えることが重要なのだ。|

「それに対して、世界はなにものにも似ていず不定形にほかならない、と断言することは、世界はなにか蜘蛛や唾のようなものなのだ、と言うことになるのである。」

(ジョルジュ・バタイユ、江澤健一郎(訳)『ドキュマン』河出文庫、2014年、 p.144)

\_

今回、穴の存在論を展開する上で、フランスの思想家ジョルジュ・バタイユの「不定形」の概念、そしてそれについての江澤氏による思想が導入された。上に引用したバタイユによる不定形の議論は、オブジェクト指向存在論における上方解体/下方解体の批判などと通じる。江澤氏はバタイユの不定形を穴(裂傷)と関連付け、その概念を思弁している。

夜楽校では、三者によってさまざまな方向に穴の存在論が拡張さ

れた。江澤氏はバタイユを足がかりに、ミニマリズムや岡本太郎の縄 文論など、さまざまな言説における穴を取り上げることによって、議論の 領域を拡張した。原氏は自作における穴を大きく平面的な穴、立体的 な穴に分類し、それらが均質空間批判としてどのように発展しうるかを 論じ、建築の問題としての穴の存在論を深化させた。

穴、オブジェクト指向存在論、バタイユ。これらが作り出す三角関係を元に、新しい建築の制作論に向けて議論を発展させる足がかりとして、非常に示唆に富んだシンポジウムになったと思われる。





会場風景

[平野利樹/東京大学助教]

## パラレル・セッションズ2017

## 「動く、動かない」

10月22日(日)に建築会館ホールにて開催されたパラレル・セッションズ2017は、台風と選挙が重なったが、無事閉会を迎えた。このイベントは、エントリー制によるセッションをワークショップ形式で同時多発的に行うもので、参加者の主体性が最も重要であるが、2016年に日本建築学会創立130周年記念事業として開催されたパラレル・プロジェクションズに引き続き、2017年は61組の参加があった。また、今回から年齢制限を撤廃することで、19歳から66歳までと幅広い年代が集まり、台風が重なったにも関わらず、仙台、福島、名古屋、大阪、京都、和歌山、岡山と全国から多くの建築関係者が集まり世代や分野にとらわれない開かれた議論が展開されたことは特筆に値しよう。

イベントの構成は2016年より変更し、議論主体の場として展示を割愛した。また、参加者の主体性を引き出すため、我々が用意する枠組みは最低限とし、セッション数を13から9に変更してテーマを設けた。メインテーマ「動く、動かない」のもと、サブテーマ「環境」、「観光」、「福祉」それぞれに3つのセッションを設け、ゲスト講師の菅沼聖氏(山口情報芸術センター(YCAM)エデュケーター)、馬場貞幸氏(弁護士、黄櫨綜合法律事務所、ライツアンドクリエイション理事)、松川昌平氏(慶應義塾大学准教授)には議論の道筋を示していただいた(表1)。

## 表1 セッション名および担当ゲスト講師

サブテーマ	セッション名	ゲスト講師
		※敬称略
環境	地方都市空間における教育価値を最大化するためのプロ	菅沼聖
	ジェクトとは?	
	都市環境におけるポジティブな制度設計の枠組みとは?	馬場貞幸
	設計の最適化が可能にする現代空間とは?	松川昌平
観光	街のメンバーシップを拡張する建築プロジェクトとは?	菅沼聖
	観光によって地域を育むための制度と空間とは?	馬場貞幸
	都市のアイデンティティを活性化させる情報環境の実装と	松川昌平
	は?	
福祉	災害に対する空間リテラシーのコントロールの方法とは?	菅沼聖
	制度設計のローカライズによって実現しうる福祉施設とは?	馬場貞幸
	福祉空間におけるデザインリサーチが切り開くプロジェクト	松川昌平
	のかたちとは?	

#### イベントを通して

多様な議論が同時多発的に行われるよう、9つに区分けされたグリッド内で各チームは10枚のパレットを用いて議論の場を自由に設え、計画した。また、ゲスト講師を迎えたオープンセッションでは、若手建築家(勝亦丸山建築計画、tomito architecture、アイボリィアーキテクチュア)が設計した3台の屋台を用意し、各ゲスト講師が屋台とともに動くことでセッションの開催場所を示す会場のアイコンとしても機能していた。これらパレットは富士から、屋台は横浜から運搬し返却するという、テーマに沿った動きに着目し、搬入と搬出だけのリーズナブルな会場構成となった。

このような会場構成のもと、3つのセッションが時間を区切り並行して 進められた。参加者は各セッションを創造的に読み替えつつ、実務に 携わる者ならではの実践を通した切実な問いがチーム内で共有され、 ありうべきアプローチについての議論により、未来にむけたプロジェクト が9つ考案された。例えば、「環境」に関するセッションでは建築設計 をめぐる制度のアップデートについて議論され、法律という枠にどのよう にしてアプローチ可能かが検討された。また「観光」に関しては、観光 客を含めた非ステークホルダーの人たちが楽しく過ごすことの意義と ファンを増やすことの重要性について、「福祉」では全国一律に決めら れている福祉空間に対する規制の書き換えやそうした枠組みの変更が 可能にするこれからの福祉施設のあり方が議論されていた。自律分 散型の意思決定や社会実験を通した暫時的な都市の改変が当たり 前になる中で、何か「動く/動かない」ということの再設定の必要性を強 く認識することとなった。

## 今後の展望

各セッションの内容は、特設ウェブサイト「パラレル・プロジェクションズ・プラットフォーム」にて後日公開し、アーカイブしていく予定である。また、参加者やゲスト、パートナーはタグ付けによって蓄積される仕組みとなっており、既に200組以上の参加者のアーカイブが達成されている。次回も同じような枠組みでパラレル・セッションズ2018を開催できればと考えており、順次アーカイブを整え、建築を取り巻くプラットフォームとして機能するよう企画を続けていく。また、このイベントをきっかけとした、参加者同士の協働プロジェクトも実際にいくつか動いており、このような現実のプロジェクトのアーカイビングも進めていければと考えている。

最後に、パラレル・セッションズの開催にあたってご支援くださった 協賛企業の建築再構企画、創造系不動産、OpenA、富士木材、そ して、議論や運営などにご尽力いただいたゲスト講師および建築文化 事業委員会関係者にこの場を借りて感謝申し上げる。





セッション風景

[辻琢磨/403architecture[dajiba]共同主宰]

[川勝真一/RAD共同主宰]

#### カルチベートトーク

#### 「建築~布~の発想」

今年度のカルチベートトークは、10月2日(月)に建築博物館ギャラリーにて開催され、登壇者は第一線で活躍する世界的テキスタイルデザイナーの須藤玲子氏(NUNO代表)を招き、モデレーターを濱野が務めた。

内容としては、まず濱野より須藤氏の略歴を紹介した後に、須藤氏よりテキスタイルデザイナーの道に進んだ経緯やテキスタイルとマテリアルの魅力、デザインの発想の原点から作品が完成するまでの過程などを通して、初期の代表作品から最新作品までを紹介していただいた。

また、建築との関係性については、建築家・伊東豊雄氏とのコラボレーションをきっかけに開始された建築家との空間プロデュースについてや各プロジェクトにおける自身の作品と建築デザインやインテリア空間イメージとの共有化について、そしてすでに箱として存在している建築空間の捉え方について、楽しかった部分や苦労した部分を披露していただいた。

今回の参加者は定員に達し、50名であった。懇親会では川口衞氏(構造建築家)より、布や膜の捉え方と考え方についてもお話いただいたことで、最後まで大変興味深いカルチベートトークとなった。





会場風景

[濱野裕司/竹中工務店]

## 学生ワークショップ2017

# [Learning from the Cities]

関東内の建築学生が集まり議論し交流するための学生ワークショップが10月7日(土)、8日(日)に開催され、参加団体8チーム(表1)、建築関係者を含む参加者延べ105名が建築会館ホールに集った。

今回の学生ワークショップは、情報化社会によりインターネットを用 いれば全国の建造物や街並みなどを見ることができる現代において、 情報に捉われずに街の魅力を知り得るべく、建築学生として街の魅力 を調査し、さらにそこから抽出したものを組み合わせ、新たなものを建 築化する企画を2日間にわたり開催した。1日目の「街バトル」は、8グ ループそれぞれが自由に選定した街をトーナメント形式でプレゼンテー ションし、それぞれの街の魅力を投票で競い合った。2日目の「Learning from the Cities」は、1日目の街バトルに参加したチームのメンバーと 街の特性を掛け合わせて新たに4チームをつくり、設計競技を開催し た。建築会館のイベント広場を対象敷地として設定した即日設計で は、今村創平氏(千葉工業大学教授、アトリエ・イマム代表)、原田真宏氏 (芝浦工業大学准教授、マウントフジアーキテクツスタジオ代表)、福島加津 也氏(東京都市大学教授、福島加津也+富永祥子建築設計事務所代表)、 前田紀貞氏(前田紀貞アトリエー級建築士事務所代表)の計4名による審 査が行われ、建築的な視点から新たな街の魅力を発見・共有し、地 方創生にもつながる可能性を見出すことを試みた。

#### 表1|参加チーム

チーム名	大学名	対象地域
オクラ	宇都宮大学、前橋工科大学、日本女子大学	前橋
Your town	芝浦工業大学、東洋大学、法政大学、慶應義	根府川
	塾大学	
建築意匠研究部	明治大学	下北沢
建築計画研究部	明治大学	吉祥寺
松田ゼミ	武蔵野大学	阿佐ヶ谷
チームT	東京工芸大学、東京理科大学	清澄白河
Woman's Architects	東京理科大学	谷根千
建築学生サークルり	共立女子大学、東京電機大学、芝浦工業大学	神保町

#### ○1日目: 「街バトル |

8グループによる8つの街について下記3つの観点よりバトル形式のプレゼンテーションを行った。

- 1、街の特徴とコミュニティのできかた
- 2、実際に街の中で見かけるデッドスポットの活用方法
- 3、その各街から導き出される建築的提案

街特有の情景を動画や模型などへ盛り込み、他チームとの差別化を計りながら個性溢れるプレゼンがなされ、別の着眼点から街を見ることで新たな発想や手法を学ぶことができた。また、建築家から見る街の見方や設計秘話などを織り込みながら議論を交わすことで、発表会からワークショップに形作られていった。各チームは発表ギリギリまで打ち合わせを重ね、街の魅力を引き出し、決勝戦では調査した街について互いのチームが対面し、審査員も交え白熱した議論が繰り広げられた。結果、1日目は建築学生サークルり(神保町)が優勝を飾り、準優勝は建築意匠研究部(下北沢)となった。

街バトル後、2日目の即日設計へ向けて、8つの街の特徴、サーベイの手法を参考にしながら、即日設計の敷地である建築会館のイベント広場と周辺の敷地調査を行い、1日目のスケジュールが終了した。

## ○2日目: [Learning from the Cities]

2日目は、建築会館のイベント広場を即日設計の敷地として設定し、「街バトル」で題材にした3つのテーマをもとに街の特徴を取り入れた提案を行った。審査形式は、1日目で戦った2チームを1つのチームとして再編し新たな4チームがコンペ形式で競う形とした。提出要項ではA3用紙4枚ほどのプレゼンシートおよびプレゼン用パワーポイントとしていたが、4チームとも模型までつくりあげ即日設計という少ない時間ながらチームが一体となった作品が多く目立った。1チームの持ち時間15分の中で5分をプレゼン、10分を審査員の質疑応答とし、4チームすべてのプレゼンが終わり次第結果発表という形をとる予定であった。しかし、想定以上に議論が白熱し、また4チームのプレゼンだけでは甲乙つけ難いほどの接戦となったため、結果発表は懇親会を挟み、思ったことや言い足りなかったことを直接審査員とぶつけ合ってからという方針へと変えられていった。

はじめのうちは硬い雰囲気であったものの、審査員の気遣いにより次第に場の雰囲気はなごみ、プレゼンでは話し合うことのできなかった他チームへの質問や意見といった、通常の学生コンペではなかなか見られない学生同士の議論も行われ、本音も垣間見られる良い議論の場となった。熱い議論の末、2日目の優勝は建築意匠研究部×Woman's Architects が飾った。

コンペの参加者からは、参加して楽しかったという意見や他の大学 との議論の場が有意義であったなどのポジティブな意見が多くみられ た。今後のワークショップにおいても、企画の目的に応じて、前例にとら

われない新しいタイプの議論の形式などを取り入れていくことの重要性 を感じた。審査員の今村氏、原田氏、福島氏、前田氏の臨機応変な 取りまとめにより、今回のワークショップは大成功となった。

最後に、今回のワークショップの開催にあたり貴重な機会をくださった日本建築学会、ご支援くださった協賛企業、そして2日間に渡りご協力くださった審査員の先生方へ改めて御礼申し上げる。

\_



左 優勝:建築学生サークル b (神保町)

右 準優勝:建築意匠研究部(下北沢)



参加者集合写真

\_

[学生ワークショップ代表:本間誠也(東京電機大学3年)]

[【参加団体】建築学生サークルト、赤レンガ卒業設計展2018実行委員会]

## 学生グランプリ2017

## 「銀茶会の茶席」

昨年に引き続き今年度の学生グランプリも建築文化週間のイベントとして独立して行われ、応募数は28作品であった。8月9日(水)に、建築博物館ギャラリーにて第一次審査会が開催され、第二次審査に進む入選3作品を選考した。また、審査員は各々審査員賞1作品を選考した。なお、審査は公開され、応募作品の所属・応募者名はブラインドされて行われた。8月17日(木)には1/1模型制作説明会を行い、本阿彌守光氏(武者小路千家)による茶席のレクチャー、構造エスキスチェックおよび審査員賞の表彰が行われた。

第一次審査結果

〈入選〉1/1模型制作

紡ぎ出す空間

佐久間信之ほか3名

信州大学/信州大学大学院

しなやか庵-2畳の茶室・12の形-

澁谷達典ほか4名

東京大学大学院

風待庵 古川亮ほか2名

東京電機大学大学院

〈審查員賞〉

井内雅子賞

木ノ花庵 福澤勇魚ほか3名

滋賀職業能力開発短期大学校

関野宏行賞

紡ぎ出す空間

佐久間信之ほか3名

信州大学/信州大学大学院 **大森晃彦、辻琢磨賞** 

片山諒ほか2名

近畿大学

濱野裕司賞

綴 澤田正梧ほか2名

島根職業能力開発短期大学校

加藤詞史、松田達賞

靄の輪郭 藤沼悠生ほか2名

千葉工業大学大学院/千葉工業大学

鵜飼哲矢賞

白纏庵 内田慎ほか2名

名城大学大学院/名城大学/名古屋工業大学大学院

川勝真一、佐藤淳、原田裕季子賞

白ノ木漏れ日

横澤遥樹ほか5名

武蔵野大学

井上宗則、川合智明、斎藤公男、山本豊津賞

しなやか庵-2畳の茶室・12の形-

澁谷達典ほか4名

東京大学大学院

10月1日(日)に、建築会館のイベント広場にて第二次審査会が開催された。第一次審査を通過した3作品の1/1模型が制作され、公開審査によって最優秀賞、優秀賞を決定した。最優秀作品「しなやか庵-2畳の茶室・12の形-」は実施施工され、10月26日(木)~30日(月)の間、銀座三越にて展示された。実際にお茶席として使用された10

-

月28日(土)~29日(日)の銀茶会参加者は390名であった。

〈最優秀賞〉

しなやか庵-2畳の茶室・12の形-

澁谷達典ほか4名

東京大学大学院

| 建築雑誌 | JABS | vol.133 No.1708 | 2018 - 03 | 活動レポート | 059

## 〈優秀賞〉

#### 紡ぎ出す空間

佐久間信之ほか3名

信州大学/信州大学大学院

風待庵 古川亮ほか2名

東京電機大学大学院



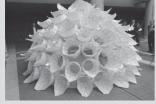


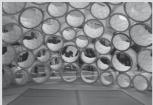
最優秀賞:しなやか庵-2畳の茶室・12の形-





優秀賞: 紡ぎ出す空間





優秀賞:風待庵

[鵜飼哲矢/九州大学准教授]

## トウキョウ建築まち歩き

## 「原宿・渋谷・代官山」

2015年で終了した建築文化週間の名物企画「東京ウォッチング」は、毎回、魅力的なテーマでまちを歩き建築を巡るもので、記録によれば、なんと四半世紀を超える27回も開催され、藪野健氏、小笠原伸氏ほか多くの方々が講師を務められていた。「東京ウォッチング」は、それぞれのまちの今の姿の背景にある物語を読み解き、それを頭で理解するだけではなく、五感のすべてによって体感することの愉しみを伝えるものであったと思う。その終了を惜しみ、それを継承すべく「トウキョウ建築まち歩き」を企画したのである。

## • 地形を体感する

さて、記念すべき第1回目の見学先は、「原宿・渋谷・代官山」である。

歩くことで体感できるのが地形であり、渋谷周辺の地形は、単純に言えば3つの丘と3筋の谷からできている。国立代々木競技場や代々木公園、明治神宮のある丘の両側の谷が合流するあたりが渋谷駅周辺。そこから渋谷川が地上に現れ、南東へと流れていく。せっかく歩くのだから、地形を体感してほしいと思い、丘から谷へ下り、再び丘に

登るルートを設定した。その道すがらの見学の軸としたのは、「渋谷駅周辺開発プロジェクト」と「代官山ヒルサイドテラス」である。この規模も背景もまったく異なる「谷のまち」と「丘のまち」では、それぞれの計画に関わる方にミニレクチャーをお願いした。

開催は2回に分けて同行程を歩いた(第1回:10月11日(水)、第2回: 10月13日(金))。募集定員は20名で、実際の参加者は第1回16名、第2回12名だった。

#### • 第1ステージ

集合場所の国立代々木競技場の原宿口から表参道を下り、かつて穏田川(渋谷川)が流れていた谷筋のキャットストリートを経て「渋谷ヒカリエ」の11階までの約2km、所要時間約40分が第1ステージである。 雑誌で紹介されたことのあるいくつもの作品を路上から見学しながらの行程であった。

「渋谷ヒカリエ」の11階には、「渋谷駅周辺開発プロジェクト」の全体模型が展示され、窓からは建設中の建物を見ることができた。ここでは、日建設計の奥森清喜氏、福田太郎氏、小実健一氏、向井一郎氏に解説していただいた。

「渋谷駅周辺開発プロジェクト」は、先行して2012年に開業した「渋谷ヒカリエ」、2018年開業予定の「渋谷ストリーム」のほか、2027年までに3つの地区で超高層ビルが建ち上がる。それぞれのタワーの意匠もさることながら、いくつものレベルで建築がつくる大地が谷を水平に繋ぎ、新たな人の流れを生むまちのつくり方が印象深かった。

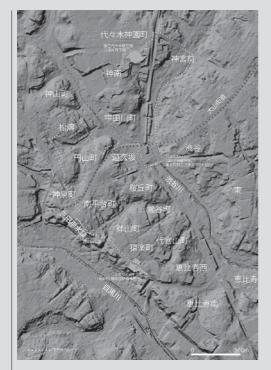
#### 第2ステージ

「渋谷ヒカリエ」から「代官山ヒルサイドテラス」までが第2ステージである。渋谷駅前スクランブル交差点を通って道玄坂を少し登り、百軒店を経て松濤へ。現在は風俗店が目立つ百軒店と高級住宅街となった松濤が、谷を隔てて隣り合う背景を解説した。渋谷区立松濤美術館で小休止のあと、旧山手通りに沿って玉川通りを横断してから三田用水跡の小径を辿り西郷山公園で再び小休止。旧山手通りに戻り、丘のまち「代官山ヒルサイドテラス」へ向かった。第2ステージは約4km、所要時間1時間半強の行程だった。渋谷駅前から旧山手通りまではほぼ上り坂で、途中の百軒店から松濤へは小さな谷の上り下りもあり、参加者にはややきついルートだったようだ。

代官山ヒルサイドテラスでは、オーナーである朝倉健吾氏(朝倉不動産代表取締役)に、この土地と旧山手通りの来歴と朝倉家の関係から 槇文彦氏とのやりとりなど、貴重なお話を伺った。その後、代官山ヒル サイドテラスと隣接する重要文化財旧朝倉家住宅を自由見学とし、最 後に参加者の感想を伺って解散となった。

## 配布冊子とWebサイト

「東京ウォッチング」で少し残念なのは、公開されている記録が「建築雑誌」に掲載された活動レポートだけであることだ。そこで「トウキョウ建築まち歩き」では専用のウェブサイト(http://bunka.aij.or.jp/machiaruki/)を開設し、そこで告知を行うとともに、活動の記録を掲載することとした。さらに参加者への配布冊子には、見学ルート以外の場所にある主要な建築作品をプロットした建築ガイドマップとまちの解説を収録した。回を重ねることにより、東京全体のまちの建築ガイドとなることを目指している。



まち歩きルート

原図:国土交通省国土地理院 地理院地図アナグリフ(カラー)





国立代々木競技場前にて

渋谷駅前交差点を歩く





渋谷ヒカリエ11階でのレクチャー (4点とも、撮影:井上登)

代官山ヒルサイドテラスで朝倉氏のレ クチャー







ハンドブック表紙 Webサイト

ガイドマップ

[大森晃彦/建築メディア研究所代表]

## 建築文化考2017

## シンポジウム「建築内自然と都市内自然」

10月5日(木)に建築会館ホールにて「建築内自然と都市内自然」と題したシンポジウムを開催した。

現在、効率性と利便性が追求された近代的価値観の都市が成熟を迎えた一方で、技術によって更なる豊かさを求め、建築や都市に自然を活用するように共生し始めている。しかし、近代化を反動とした自然へのノスタルジーではなく、新たな場(環境)としての継続的価値を指向するべく、また、都市と建築における自然と人工の関係を考えながら、建築と都市はどのように自然と呼応するべきか、呼応するために自らがどのようにふるまうかなどを今回のシンポジウムで議論した。

\_

第一部では、趣旨説明を加藤が努め、米山勇氏(江戸東京博物館研究員)、石川初氏(慶應義塾大学教授)、吉村靖孝氏(明治大学教授)より、それぞれの視点でご説明いただいた。

\_

## • テーマの共有と解説

テーマと言葉の定義について、冒頭に加藤から説明を行った。

「自然」を大雑把に見ると、植物は全て自然と捉える一方で、個々の植物や地形の履歴や由来を詳細に見ていくと、全て人の手を介した人工物と捉えることもでき、この自然との距離感を「キーワード1」とした。また、手つかずの自然から、良く手入れされた庭や農地まで人間の介入の度合いによってその姿や形、距離感が変わってくる。この介入=コントロールの概念を「キーワード2」とした。

何が自然であるかといった見立ての議論ではなく、ここで扱う自然は 比較的狭義の自然を対象とし、活きた緑を生活に取り込めるかを議論 としたい旨を説明して共通の基盤とした。

-

## 日本建築と庭

最初に、日本建築と庭をテーマに米山氏からお話いただいた。建築(人間)と自然との距離感を、「畏怖」「接近」「同化」といった整理をし、この「取り込み」への過程を、神社、寺院から寝殿造、園芸を描いた江戸期の錦絵、明治の近代建築を通して歴史軸を意識しながら俯瞰的に解説された。

コンドルの岩崎邸バルコニー、堀口捨巳の建築と不可分な庭、西澤、伊東、安藤の住宅に見る坪庭などが上げられ、現代のアトリウム、屋上緑化について述べながら、藤森建築の屋根を結びとして、有限性、持続性について触れられた。

## • 場所·地形·植物

次に場所、地形、植物を題材に現代都市における緑についてランドスケープ的な視点から、石川氏にお話いただいた。都市の路上で観察できる植物の種類や、そこから見える「都市自然」、そして、地域住民から建築家までさまざまな「植物を用いる人間」の思惑と、その表われとしての「栽培されている植物」について、日常的な観察を元に示された。

植物が示すものとして、植物を取り巻く環境や時間といった概念を持つことを説明され、建築に用いられる植物の類型から、それらが示しているものを説明された。また、「老樹と白いポッド」に代表される時間の問題、植生図などをもとに植物の遷移などから考える植物など、「風景と時間のスケール」の概念に触れられ、興味深い内容となった。最後に都市の植物を「造園・園芸・雑草」の3種類に分けて捉えるとわかりやすいとして結ばれた。

#### • アーバンファーミング

第一部の最後は、吉村氏よりアーバンファーミングと題して実作である菜園長屋を中心に解説された。自然の捉え方として、国土(自然) そのものを作ってきたオランダの自然観について触れ、畏怖のないドライな感覚を紹介し、長屋形式の共同住宅の屋上に小さな菜園を組み込んだ試みを説明された。

農業が都市を生んだといった話題提供から、農業を行うことが必ずしも自然ではないといった概念を呈示された。

第二部では、見届け人として、藤森照信氏(江戸東京博物館館長) が加わり、4名によって話題が更に広がった。都市と帰化植物について、都市の持つ余力について語られながら、細心の注意が必要なことの話題で口火が切られ、藤森氏からは、各登壇者に対して、バルコニー、ベランダのもつ庭との関連性と可能性や森邸の庭と株立ち樹形、戦後の庭の感覚、オランダ農業の背景などについてコメントが寄せられポイントがピックアップされた。

また、建築と自然の関係が濃厚になっていくことついて、スケールの 問題として捉え直す旨が、石川氏から呈示され、建築と自然の同化に ついては屋根、防水、緑化へと話題が広がった。藤森氏からは、植 物がいかにアンコントロールなものであるかとその思いが語られた。

最後に「庭は末期の眼で見るべし」の言葉と藤森氏の建築や自然 との葛藤に勇気づけられる形で、終会となった。





会場風景

[加藤詞史/加藤建築設計事務所主宰]

# 建築文化週間2017開催報告(支部企画) 日本建築学会

## ●北海道支部

## 見学会「鉄のまち室蘭の原点を巡る」

1907年の日本製鋼所、1909年の輪西製鐵場(現新日鐵住金)の設置以来、室蘭は「鉄のまち」として発展し、現在へと至る。日本製鋼所の敷地内の工場群や瑞泉閣(迎賓館)、新日鐵住金所有の知利別会館(現知利別迎賓館)などを見学することで、室蘭の歴史的建造物を地域資源として意識してもらえるよう、普及啓蒙をはかるべく見学会を9月30日(土)に開催した。参加人数は定員に達し40名であった。

見学会は、現存する道内最古の木造駅舎を再利用した「室蘭観光協会(登録有形文化財)」から開始した。室蘭観光協会内で見学を兼ねて受付を行い、バスに乗車した後、本会の趣旨説明を行った。その後、日本製鋼所へと移動し、グループを2つに分けて、瑞泉閣(迎賓館)や一号役宅、鍛刀所、明治期に建築されたレンガ造の工場などを見学した。なお、瑞泉閣は、大正天皇が皇太子として室蘭視察を行った際に、その宿泊所として建築された歴史的建造物であり、一号

役宅はこの視察に付き添った華族や政府高官の宿泊所として建築された歴史的建造物である。参加者たちは、贅を凝らしたこれらの建築物、あるいは日本製鋼所設置時に建築された趣のあるレンガ造の工場に大変興味深く見入っていた。

日本製鋼所内の歴史的建造物群を見学した後は、知利別会館へと移動し、まずは大ホール内で知利別会館の概要についての解説を受けた。その後、実際に建物内部や建物の南側に設けられた日本庭園の見学を行った。知利別会館は、現在も現役で使用されている建築であるため、基本的に一般公開は行われていない。しかし、今回の見学会が、日本建築学会北海道支部が主催する学術的目的に基づくものであることから、特別に見学の許可をいただくことができた。初めて建物内部を見学することができた参加者からは、喜びの声が挙がっていた。

見学会当日は天候にも恵まれ、日本製鋼所、輪西製鉄所といった 室蘭の発展を支えた建築物群を室蘭の歴史的遺産として振り返ることができ、大変有意義な見学会となった。最後に、見学会開催にあたってご協力いただいた蘭歴建見会、本見学会を後援していただいた室蘭市、室蘭市教育委員会、室蘭観光協会、むろらん100年建造物保存活用会、そして、見学会の準備や解説などでご尽力をいただいた日本製鋼所職員、新日鐵住金職員の方々に対し、ここに感謝を申し上げる。





瑞泉閣での解説風景

知利別会館前での集合写直

[武田明純/室蘭工業大学助教]

## 第42回「北海道建築賞(2017年度)」表彰式・記念講演会

第42回北海道建築賞の表彰式・記念講演会が、建築文化週間のイベントとして、10月27日(金)夕刻より北海道大学遠友学舎において開催された。会場には、一般市民も含め、学生、大学関係者、建築業界関係者など約50名が集まった。会場のレイアウトを例年の一般的なレクチャー形式から変更したことで、より親密な雰囲気の中で行われた。

表彰式は、福島明北海道支部長の挨拶に続いて、北海道建築賞として「六花亭札幌本店」の設計(河合有人君)、北海道建築賞審査員特別賞として「Shimokawa Blanc」の設計(小倉寛征君)が発表され、福島支部長より各受賞者に表彰状と副賞のプロンズ彫刻が手渡された。その後、山田深北海道建築賞主査から審査経緯・結果および審査講評についての報告がなされた。

今年度の応募は18作品であり、北海道建築賞の基本的な評価軸である「先進性」「規範性」「洗練度」を今回も継続することを確認したうえで、書類審査と現地審査を経て、8月21日(月)に開催された最終審査会において長い時間をかけた活発な議論の末に得た結果であることが報告された。北海道建築賞を受賞した「六花亭札幌本店」は、音楽ホールを核とした商業的複合建築でありながらも都市における公共的空間を創出した質の高い作品であることが特に評価された。また、北海道建築賞審査員特別賞を受賞した「Shimokawa Blanc」

は、地元工務店と札幌の建築家が協働することで、地方の小さな町の 森林資源を生かしつつ質の高い循環型住宅をつくり出す試みであることが評価された。

以上の表彰式に続いて受賞者による記念講演会が行われ、河合有人君から「六花亭札幌本店」の設計について、また小倉寛征君から「Shimokawa Blanc」の設計についてのプレゼンテーションがあった。ここでは、各設計者の基本的な考え方から、設計プロセスや具体的詳細に至るまでの解説によって、各作品についての理解を深めることができた。

続いて行われた記念パネルディスカッションでは、プレゼンテーションでの内容をベースとしつつ、北海道や札幌に対する捉え方や現代における建築家のあり方など、より詳細に各氏の考え方などを把握することができた。2つの作品はそれぞれ対照的に見えつつも共通する側面も併せ持っているだけに、いい意味で振幅のある良い議論がなされたように思われる。

第42回を迎えた北海道建築賞は、日本建築学会各支部の建築 賞の中で最も早くに創設されたものであり、地域性を強く意識した北海 道ならではのものである。40年を超える歴史を通じて、"北海道の現代 建築"を位置付ける基軸を担ってきたことは確かであろう。以上のことか ら、北海道建築賞授賞式および記念講演会を今後も建築文化週間 の行事として継続し、より一層意義のある場として成熟させて行きたいと 考えている。



パネルディスカッションの様子

[山田深/北海道建築賞委員会主査]

## 「くしろ防災屋台村」

建築文化週間事業として、北海道支部では親子を対象に地域で防災を学ぶイベントを開催している。本年度は昨年に引き続き道東の 釧路市において、10月28(土)に北海道釧路総合振興局との共催で、第8回くしろ安心住まいフェアにて「くしろ防災屋台村」を釧路市こども遊学館において開催した。この事業の特筆すべき点は、住まいに関する防災知識および住まいの知識向上を図ることにより災害に強く、安心で、質の高い住まいづくりの推進に寄与することを目的とし、釧路管内の建築関係団体と協働して開催していることにある。当日は、計359名の参加があり、未就学児から大人まで幅広い年齢層に参加していただいた。年々参加者数が増え、今年も昨年を越える参加者数となり、開催時間中来場者が途切れることがなかった。

くしろ防災屋台村のコーナーでは、「地震時の我が家のバーチャル

体験』「つくって、ゆらしてみよう」の2つのイベントを体験できる内容とした。

「地震時の我が家のバーチャル体験」では、参加者1名もしくは2名ずつとし、6畳のスペース内において自由に行動してもらい、地震時の室内音により地震を感知したら家具の倒れてこない室内空間へ移動することとした。この移動中の負傷部位や負傷程度を避難誘導システムで評価し、人工音声で伝えられる情報を基に、家具が倒れてこない安全な室内空間への移動が成功するまで体験した。

「つくって、ゆらしてみよう」では、色々な長さの竹ひごとスーパーボールを使って建物模型を作ってもらい、それをポータブル振動台に載せて、揺れ方や壊れ方を観察した。さらに、竹ひごを斜めにブレースとして入れたり、厚紙を壁として入れてみるなどの補強を試し、どのような建物が地震に強いかを遊びを通して体験した。

他の団体も工夫を凝らした出展内容となっており、参加者の評価 も高いものであった。また、当日は会場に隣接する釧路合同庁舎で「公 共建築の日」フェスティバル2017 in 釧路を本イベントと連携して開催 しており、地域の建築文化醸成に貢献するものとして定着しつつある。





地震時の我が家の バーチャル体験の様子

つくって、ゆらしてみようの様子

[麻里哲広/北海道大学助教]

## ●東北支部

## 第28回「東北建築作品発表会」

10月7日(土)に、せんだいメディアテーク7Fスタジオシアターにて 第28回東北建築作品発表会が開催された。本発表会は、東北建 築賞作品賞応募者に作品についてプレゼンしていただくものであり、 作品賞の1次審査を兼ねるとともに、学会と地域社会との交流の推進、 建築関係者の研鑽、ならびに東北地方の地域特性に立脚した建築 作品の探求を目的としている。今年度は小規模建築物部門9作品、 一般建築部門26作品、その他の建築物部門1作品の計36作品であ り、震災前の水準に戻った。また、震災復興に関連する建築作品の 応募が増えた点も特徴的であった。発表会においては、まず挨拶を 野村より行い、その後、小地沢将之選考委員長により発表にあたって の注意事項が説明された。その後の発表では、1作品につき8分の短 い持ち時間であったものの、設計者から作品のコンセプトやアピールポ イントについて充実したプレゼンテーションが行われた。質疑応答も2 分という短い時間ではあったものの、活発な議論がなされ、活気のある 発表会となった。比較的参加者も多かったが、来年度においては、さ らに関係団体、大学などを通じた積極的な案内を行い、より活気のあ る発表の場にするよう努めていきたい。

「野村俊一/東北大学准教授]

| 建築雑誌 | JABS | vol.133 No.1708 | 2018 - 03 | 活動レポート | 063

#### ●関東支部

## 関東支部70周年記念事業見学会

#### シリーズ 名作をみる「大多喜町役場」

関東支部では建築文化週間の企画として例年建築ツアーを企画してきた。また、今年度は支部70周年にあたることから、昨年から始めた「シリーズ名作を見る」という見学ツアーを拡大し、記念企画として戦後高度成長期に完成した支部内各都県を代表する9つの名作を巡る連続見学会「70周年記念事業・シリーズ名作をみる」を6月より順次開催してきた。

9作の名建築をみる中でそれぞれの状況に対応し、今もって新たな価値を付加しつつ愛着を持って使われ続けている建築の実情を体験するとともに全体を通したシンポジウムを開催し、来る2020東京オリンピックパラリンピックとその後の建築のありようや課題を探ることを目指したものである。

9番目となった千葉県大多喜町役場(旧本庁舎:1959年 今井兼次、 現本庁舎:2012年 千葉学建築計画事務所)の見学会を建築文化週間 2017関東支部企画と位置づけ10月7日(土)に50名余りの参加のもと 開催された。

もともとの町役場は、戦後、高度成長期における地方自治体の庁舎としてモダニズムの薫り高い中にも今井兼次ならではの手作りの要素がもりばめられた名建築であるが、その名作のオリジナリティを尊重しながら千葉学建築計画事務所による増築と改修により現代の町役場として再生し、保存問題の一つの解を示したことから、2013年ユネスコアジア太平洋文化遺産保全賞功績賞に輝いた。

本見学会開催に際しては、地元千葉支所が中心となって町との 事前の調整、資料整理、会場設営が行われ、当日、メインの説明者 は現在に至る保存活動の経緯に深く関与された建築家の夏目勝也 氏にお願いした。

会では、概要説明や飯島町長による挨拶の後、夏目氏による「大 多喜町役場はなぜ壊されなかったのか―保存要望に頼らない地域 の建築家の取り組み」というテーマで講演が行われた。

この中で夏目氏は、1959年に竣工した旧庁舎は昭和の大合併で全国に建てられた地方庁舎の中でもとりわけ革新的なものであったこと、平成の大合併の波で旧庁舎の建て替えの流れができていた中、日本建築家協会保存問題委員会の大会が大多喜町役場で開催され、池原義郎氏をはじめ著名な建築家や構造家がこの庁舎の建築的価値を訴えたことを契機に町が現庁舎保存と改修、増築による庁舎再生にかじを切ったこと、さらにその設計者選定に際し審査委員となる古谷誠章氏が公開プロポーザルを提案し、多くの応募者の中から千葉学建築計画事務所が選定された経緯、増築棟と既存庁舎改修にかけた千葉学氏の熱意や苦労が興味深い語り口で披露された。

次に、実際に庁舎内外を見学しながら要所要所での解説、質疑 応答、意見交換が活発に行われた。

夏目氏を中心とした案内と解説では講演の会場となった旧庁舎大会議室のスチールサッシュの詳細を皮切りにエントランスほかのトップライト、屋上ペントハウスの陶片モザイク壁画など随所にちりばめられたデザインやディテールの意味を探りながら当時としては画期的な12メートルの無柱空間構造の旧住民課窓口スペース(現多目的スペース)を見た後、増築された新庁舎に移動し、30メートル四方の高天井バイアス梁空間を体感した。旧庁舎の構造的挑戦心を引きづけるかたちの大空間の構造形式や空調、吸音の在り方、トップライトを含めた執務空間としての光環境への配慮などが質疑され、大会議室に戻って

からの質疑応答でも参加者から多くの意見が述べられた。肯定的な 感想だけでなく現状の庁舎のあり方が今井建築の手作り感の良さを 引き継ぐという観点から最良の答えなのかとの疑問を投げかける意見 もあったことを申し述べておく。

優れた文化資産としての建築のオリジナリティの尊重と今日化のジレンマ、人口減少、行政サービスの変化、そこで働く職員のワークプレイスのあり方がさらに30年、60年というタイムスパンの中でどう変化し、建築はどう対応することができるか、時間や経年という評価者の前で建築に携わる者としてどうふるまうかという課題を強く意識する見学会となった。





「武田勤/松田平田設計]

## 第23回構造デザインフォーラム2017

## 「アーキテクトとエンジニアが語る、木でつくるつくりかた」

日本建築学会関東支部構造専門研究委員会(設計WG)主催の 構造デザインフォーラム2017「アーキテクトとエンジニアが語る、木で つくるつくりかた」が11月11日(土)に行われた。1995年にスタートして今 年で23回目を迎えた構造デザインフォーラムは、恒例の建築文化事 業の一環に位置付けられており、昨年同様、建築博物館ギャラリー で11月10日(金)~17日(金)に開催された「アーキニアリング・デザイン (AND)展2017 木でつくるつくりかた」との連携を図っての開催となった。 今年度の構造デザインフォーラムは、「アーキテクトとエンジニアが語 る、木でつくるつくりかた |と題して4名のアーキテクトとエンジニアに講演 していただいた。アーキテクトの立場から菅井啓太氏(坂茂建築設計) と加藤詞史氏(加藤建築設計事務所)、エンジニアの立場から海老澤 渉氏(三菱地所設計)と小野塚真規氏(オノツカ)に講演していただいた。 全体の進行をモデレーターの斎藤公男氏(日本大学名誉教授)が行 い、司会を山我信秀氏(NTTファシリティーズ)が行った。参加人数は、 91名(社会人47名、学生44名)と多く、RC造、S造などと並ぶ材料として 木造建築に対する関心が寄せられている状況が感じられた。

## • 坂茂建築設計での18年

菅井氏より、坂茂建築設計で担当した木造建築を中心に紹介された。スパン20mの空間を木造で構築した体育館では、厚さ60mmの湾曲LSL(Laminated Strand Lumber)を上下弦材とし、それをつなぐラチス材を鉄骨としたハイブリットトラスアーチを採用していた。内部空間からは鉄骨部材が極力見えないような配慮がされていた。図書館に付帯するアトリウムでは、耐火構造であるため木材は構造耐力上考

慮できずに、設計上の余力とせざるを得なかった。耐火構造では、木 造の採用が困難である状況が感じられた。ゴルフ場のクラブハウスで は、柱と屋根が一体となったユニットにより構成され、3次元的な架構 をスイスの木造ファブで3Dデータから削り出し3次元に曲がっている 部材を製作しており、木材加工の進化が感じられた。

「小・中・大規模施設における木材活用」を通じていま思うこと 海老澤氏より、木造建築の設計事例と所属会社での取り組みを紹 介された。設計事例として、長さ900mm程度の120角の木材をログハ ウスのように積み重ねることで構築したトイレ(小規模施設)と集成材によりス パン12mの空間を構築した防災センター(中規模施設)の紹介があった。 トイレの設計では、積層するルールを定め意匠担当者に自由なデザイン を可能にしていた。防災センターでは、鋼板挿入ドリフトピンによる接合と していたが、想定以上に鋼板挿入のためのスリットが入り、製作者とスリッ トのサイズを最小にする調整が行われていた。所属会社での取り組みと して、CLTと耐火木材による集合住宅、CLTにより屋根を架構した旅客 ターミナルの紹介があり、CLTの取り組みについて説明があった。

#### かたちと力

加藤氏より、梅郷礼拝堂について紹介された。長い間放置された 魅力的とは言えない計画地を建築という「書き換える力」により新たな 価値を見出していた。柔らかな曲線で囲まれた三角形状の屋根を柱 や壁でなく3組6種類の組柱の相持ち架構により支えている。組柱は、 玉簾状に組まれた柱材で構成されており、小さな材が助け合い大きな 屋根を支えるという礼拝堂に相応しい計画である。組柱には戸建住 宅用の柱材として流通している汎用性がある製材を用いることでコスト を抑制している。組柱の接合は、木と木を組み合わせることにより荷重 を木から木へダイレクトに伝達する方法としている。木材の繊維方向 に力が伝わるように加工形状を工夫しており、経年変化のガタも生じに くく、荷重に対して変形しにくくする配慮がなされていた。

## プレカット技術の変遷

小野塚氏より、木材の加工、主にプレカット技術について紹介され た。住宅と非住宅の設計から加工までの流れについて自社を例に挙 げ説明された。CAD / CAMにより、高精度の加工が可能になり、従 来の加工図から手作業で行っていた加工から飛躍的に進歩してい た。構造解析モデルやBIMと部材加工の3Dモデルをリンクさせるこ とで、施工図の作成を省力化できるだけでなく複雑な形態、接合部な どの加工の可否を設計時に確認することが可能となった。また、自社で 開発した木質ラーメン工法やCLT屋根パネル、CLT耐震壁の紹介 があり、それらの技術を採用した専修学校「郡山へアメイクカレッジ」 の事例を説明された。CLT屋根パネルは、集成材の梁材との合成梁 となっており、10m 超のスパンを実現していた。

## • パネルディスカッション

講演者4名にモデレーターの斎藤公男氏を加えて行われたパネ ルディスカッションでは、木造の課題や展望について議論した。木造 の耐火性能確保については、日本の耐火に関する法律や検証方法 が海外と比較して厳しすぎないか、もっとよい対応方法がないのかと いった意見があった。構造的な話題では、特殊な構造を追い求めす ぎている傾向にあり、無理していないか。その反面、そのようなチャレン ジがあって木造技術の発展が促された等、議論があった。





モデレーター斎藤公男氏とプレゼンター 会場は学生も多数参加し満員となった







斎藤公男氏 日本大学名誉教授

菅井啓太氏 坂茂建築設計

海老澤渉氏 三菱铀所設計





加藤詞史氏 小野塚真規氏 加藤建築設計事務所 オノツカ

[山我信秀/NTTファシリティーズ、関東支部構造専門研究委員会設計WG主査]

#### ●東海支部

# 建築ウォッチング「中京テレビ新社屋見学――日本の真ん中、名古屋 の真ん中から、あなたの真ん中へ。テレビの現場」

今年度の建築ウォッチングは、10月7日(土)にまちびらきされた「ささ しまライブ24」地区に建つ中京テレビ放送の新社屋を10月14日(土)に 見学した。本見学会は、解説(約50分)、見学(約80分)、質疑応答(約 20分)というプログラム構成で実施された。解説には、新社屋の設計に 深く関わった3名として、白石吉彦氏(中京テレビ放送)、犬飼高嘉氏(伊 藤建築設計事務所)、森下洋志氏(日建設計)がご担当くださった。

はじめに、白石氏よりまちづくりの観点から「ささしまライブ24」地区の 歴史について古地図を用いてお話しいただいた。見学施設のあるこ のエリアは旧国鉄笹島貨物駅跡地および中川運河船だまりとして知ら れる場所である。1886年に旧名古屋駅が開業したものの、明治末期 はまだ一面が田んぼだったこの地は、貨物と旅客の急速な伸びに応じ て名古屋を代表する貨物基地となっていく。1975年代には貨物の取 扱いが廃止され、2005年には愛・地球博のサテライト会場として使用 された。その後、「ささしまライブ24地区整備方針」が策定され、オフィ ス、放送局、大学、行政などが連携し、4つの魅力(エコでおしゃれ、国 際歓迎・交流、ホールが多い街、水辺の公園)を持つエリアとして整備され ていく様子が紹介された、八事の旧中京テレビ放送局からの移転の 経緯についても伺った。

続いて、犬飼氏より意匠の観点から建築計画面の5点の特徴(ガ ラス貼りの電波塔、6面浮き構造のスタジオ、極限まで平滑な床、コミュニケーショ ンを誘発し部局間の連携を強める平面計画、個性的なコラボレーションエリアと 会議室)について伺った。

最後に、森下氏より3点の構造面の特徴(基礎免震構造の採用、骨

2018.03 活動レポート 建築雑誌 | JABS | vol.133 No.1708 065 組みを検討する際の苦労話、構造設計の役割)についてお話いただいた。 名古屋の玄関口に位置し、東日本大震災以降のあるべき放送局施 設として、地域に開いた建築を目指したことが理解できた。

その後、普段なかなか見ることのできない放送局内を見学した。見学は3グループに分かれて、電波塔、3階スタジオ、報道フロア、食堂、マスタールーム、エントランスホール、コラボレーションエリアを巡った。音楽番組と対談番組が同時撮りできる遮音性の実現、スタジオと倉庫の配置関係、落下防止策を施したスタジオの天井、各階に設定されたコンセプトカラー、営業・編成・制作の隔たりをなくしたフロアの中心にあるコラボレーションエリアに仕掛けられた楽しげな工夫など途切れることなく見所があり、事前解説のおかげで理解が進んだ。

32名の参加者からは、見学中もその後も活発な質問が出された。耐震性についての裏話、売店が建物にない理由、開業後の不具合はないか、インテリアデザインのコンセプトといった質問に対する回答を通して、本施設の企画を通して交わされた妥協のない議論、一致団結して情熱的に建設に取り組んできた様子が伝わり、建物をただ見るだけではなくその中身を知ることができた見学会であった。ご対応くださった関係者の皆様には改めて深く感謝申し上げる。



デザイン性を重視して角に配置されたガラス貼りの電波塔を持つ外観





解説風景

まちに開かれた開放的なエントランス

[夏目欣昇/名古屋工業大学准教授]

## ●北陸支部

## たてもの探偵団2017

## 「富山の建築や文化を子供も交えて見学するツアー」

北陸支部富山支所では毎年、建築文化週間の活動として、子供

や学生と建築や地域の魅力を学ぶ「たてもの探偵団」を実施してきた。 今年度は9月30日(土)に見学会を開催し、建築家・大野秀敏氏(東京大学名誉教授)の解説のもと、30年以上にわたり設計に関わってこられたYKK 関連施設を見学した。主に、前沢ガーデンハウス(1982年、横文彦設計、大野氏が横総合計画事務所時代に担当)、前沢円劇場(1989年)、YKKセンターパーク丸屋根展示館(2008年改修)、K-Hall(2017年)、K-Town(2016~17年)、YKK滑川寮(1994年)などである。また、大野氏が設計した建物以外にも、桜花園、パッシブタウン、YKK堀切寮、YKK黒部寮なども見学した。

その際、偶然にも、2017年度日本建築学会文化賞を受賞した吉田忠裕氏(YKK AP代表取締役会長 CEO)と出会い、直接話を伺うという幸運にも恵まれた。一企業が、建築家とともに建物ひとつひとつを丁寧につくり、大切に使い続けている様子、企業の敷地内に留まらず積極的に街へ飛び出し地域づくりに関わっていく姿勢を目の当たりにした。また、ひとりの建築家が30年以上にわたり、クライアントの信頼のもと、さまざまなデザインを展開していったことに、建築という仕事の素晴らしさを再確認した。

好天にも恵まれ、探偵団史上最大の総勢47名の参加者とともに、 建築や空間を頭だけでなく身体で満喫した一日であった。



街へ飛び出した分棟型の単身寮、K-Townの一角で集合写真

[萩野紀一郎/富山大学准教授]

# 第5回「福井の地から建築史・建築論を考える」 フォーラム「日本の美意識と建築論―美と用の問い」

この北陸支部福井支所の企画事業は、福井の地に深く関わる森田慶一の『西洋建築史概説』(1962年)の刊行50周年を記念した加藤邦男氏の講演会から始まり、第2回以降は、森田慶一から増田友也への建築論的思索をめぐって議論を積み重ねてきた。第5回となる今年度は、かかる建築論の新たな進展を目指して中堅・若手研究者による建築論フォーラムを10月14日(土)にAOSSA601-A研修室にて開催した。今回のテーマは「日本の美意識と建築論」と設定し、能楽の思想を追究してこられた佐々木香織氏(石川工業高等専門学校准教授)とイギリスのモリスや日本の民藝を実践も含めて研究しておられる杉山真魚氏(岐阜大学准教授)を発表者に迎え、討論会のコーディネーターとして、修学院離宮などを具体例に日本近世の住まいを究明してこられた田中明氏(武庫川女子大学専任講師)と司会の市川が進行役を担当した。

まず佐々木氏は、観客と共同して作り上げる美意識の中で能楽を 捉え直し、西洋演劇論と世阿弥能楽論を比較検討しつつ、舞台芸術

の美と用を考察した。特に古代ギリシア劇やシラー演劇論を引用しながら、世阿弥伝書のテキストを精読する考察に、参加者の多くは能楽の伝統に向けた鋭く新鮮な印象を受け止めたと思われる。さらに杉山氏は、森田慶一『建築論』(1978年)での民藝・民家の視座を踏まえることから導入し、そのうえで柳宗悦や今和次郎、ラスキン、モリスら広範な射程において民藝論の「用美不二」とする価値認識とその実践、そして民藝品・民家から創出する「静動一如」を実例から深く切り込まれた発表内容に、会場の参加者は引き込まれた。その後の討論会では田中氏が、佐々木氏と杉山氏に共通して「民衆」への姿勢や、制作者と受容者での「主客共同」などの問いを投げかけられ、それに対し参加者も積極的に加わった実り多い討論が活発に交わされ、尽きない議論は終了後の懇親会へと続いた。

当日は、地元の福井だけでなく、北陸各地や関西方面などを含め17名の参加があり、日本の伝統的な美意識をめぐって刺激的な討論が行われた。開催にあたり、ご協力いただいた関係者にはこの場を借りて深く感謝申し上げる。引き続き、来年度の第6回においても中堅・若手の研究者や学生を中心とした建築論フォーラムを積極的に企画し、北陸・福井から新たな建築論的思索の課題を見出して広く発信したいと考えている。





左から田中明氏、佐々木香織氏、杉山 討論会でのフリーディスカッション 真魚氏

[市川秀和/福井工業大学教授]

## 見学会「建築まちあるきツアー」

金沢中心部にはさまざまな時代の建築が混在しながら現存している。「こまちなみ保存区域」のような歴史的まちなみから現代の建築までが入り交じりながら魅力的な都市空間を造り出している。このような建築やまちなみをマップを片手にゆっくりと巡り歩くことで、普段気がつかなかった新しい金沢の魅力に気がつくはずである。

そこで、今年度建築文化週間の企画として石川支所では、10月21日(土)に建築まちあるきツアーを開催し、金沢21世紀美術館から柿の木島、里見町、本多町、新立町などの建築やまちなみを歴史と現代を重ね合わせ解説しながら巡った。曇り空ではあったが天気にも恵まれ、他県の参加者を含む16名の参加があった。まちあるきのガイドは宮下が行い、金沢市役所をスタートして近年移築整備された本多公園の長屋門や金沢21世紀美術館、鈴木大拙館などの現代建築を中心に見学した。休憩後、鞍月用水沿いの小さな橋が連続するまちなみや、近代和風の家が連続する里見町のこまちなみ保存区域、さらには旧川縁米穀店を改修した金澤町家情報館などの歴史的な環境を残すエリアを歩いた。最後に新竪町商店街のリノベーションなどを見学し終了した。

金沢市内に住む参加者からは、「普段、施設として各建築物を見ることはあるが、このように歩きながらまちなみとして見ると金沢の新しい魅力に気づいた。」などの声があり、他県の参加者からも「ガイドブックには載っていない金沢のまちなみを見ることができてとても楽しかった。」

という感想も聞かれ、とても有意義なまちあるきとなった。



金澤町家情報館で説明を聞く参加者 鈴木大拙館を見学する参加者

[宮下智裕/金沢工業大学准教授]

#### 講演会「建築のはたらき」

北陸支部富山支所は、建築文化週間の活動として今年度も講演会を企画した。「建築のはたらき」と題した講演会は、建築家・香山壽夫氏(東京大学名誉教授)を迎え、10月26日(木)に富山県民会館にて開催され、約140名の参加があった。

建築は、単に雨風をしのぐための道具ではなく、人と人をつないで 共同体をつくり上げ、時と時をつないで歴史を築き上げる芸術である。 そのはたらきこそ、今日見直さなければならないということを、香山氏が自 ら撮影した古今東西の建築写真とあわせて、香山氏自身の設計作品 も紹介しながら、熱く語っていただいた。

個人的には、内容はもちろん、2枚の対比あるいは類似する写真を 見せる手法、優しく問いかけるような口調のお陰で、30数年前に受け た大学院でのレクチャーにタイムスリップしたような錯覚を覚え、80歳 を超えてもますます元気な先生に敬服した次第である。

参加者は、専門学校生や大学生から年輩者の方々まで多岐に渡り、質疑応答などでは和やかな雰囲気の中、ざっくばらんに話を伺うことができた。



香山壽夫氏のレクチャーの様子

[萩野紀一郎/富山大学准教授]

## 第7回「越前・若狭の建築文化探訪」

戦後福井の近代建築見学会(1) 五十嵐直雄設計「福井神社」 (1957年)

福井県内の多様な建築文化を探訪する本企画は、これまで民家や茶室、織機工場、山村集落などの伝統的な木造建築を中心に巡ってきたが、第7回の今年度は、鉄筋コンクリート造による戦後福井の近代建築を代表する「福井神社」を見学対象に選定し、10月28日(土)

に見学会を開催した。2013年創設の東京・国立近現代建築資料館を拠点として、現在、全国の戦後建築の緊急基礎調査が着実に進められている状況にも対応したものである。

福井神社は、JR福井駅近くの旧福井城(現・県庁)の内堀に沿った一画に、幕末の藩主・松平春獄を祀る国内最後の別格官幣社として1943年に総ヒノキ造りの壮麗な社殿で創建された。ところが、終戦直前の大空襲で全焼し、また1948年6月の大地震によって再建は引き延ばされた。その後、1952年春の復興博覧会を機に市内の復興整備が進む中で、福井神社の再建が具体的に検討され始め、かかる実施設計を担当したのが、当時の新制・福井大学工学部建築学科の若き助教授の五十嵐直雄であり、1957年に竣工した。

五十嵐直雄(1915年~1982年)は、東京大学建築学科を同期生の丹下健三や大江宏らと1938年に卒業後、満州国務院建築局に勤務した後、終戦後は福井へ帰郷して戦災都市の福井の復興を担った中心人物であり、のちに福井大学初の県人学長となったモダニズム建築家として知られている。

まず案内役の市川より、福井神社の由来や再建の経緯の説明があり、続いて朝日海秀君(福井工業大学4年)が、卒業研究で取り組む福井神社の実測調査を踏まえて、社殿の配置構成には黄金矩形と正方形を使った幾何学的な設計手法が確認されることを詳しく解説した。その後黄金矩形の大鳥居を潜ってから棟木一棟持柱フレームによるフラット屋根の拝殿内部へ入ると、五十嵐直雄が追究し続けた「真壁の意匠」による清澄で透明性に満ちた内部空間があり、参加者の多くは感動的な印象で受け止めていた。こうした五十嵐独自のモダニズム手法は、近代建築の巨匠ミースに通じる設計態度であり、さらに戦後日本の建築界に顕著であった鉄筋コンクリート造による伝統意匠の表現に位置づけられるものである。

当日は、小雨の降る天気であったが、市内の大学生や建築事務所の方、熱心な一般市民の方々により32名の参加があり、とても賑やかで充実した見学会となった。









福井神社での見学会の様子

「市川秀和/福井工業大学教授]

## ●近畿支部

## 近代建築見学会および講演会「宮津市庁舎ほか」

日本建築学会建築文化週間事業の一環として、京都府宮津市にて、近畿支部主催により宮津市庁舎などの見学会と講演会を10月7日(土)に開催した。

宮津市庁舎は、建築家・沖種郎(1925年~2005年)の設計により1962年に竣工したものである。打ち放しの鉄筋コンクリート造で、大きなピロティ空間や広場を備え、かつての城下町の門をイメージさせる大胆で象徴的なデザインが特徴の、優れた建築作品である。

設計者の沖は、宮津市に近い京都府峰山町(現・京丹後市)に生まれている。東京大学を卒業後、建築家の丹下健三に師事した後、建築設計事務所を設立し、芝浦工業大学教授、同学長も務めた。宮津市庁舎がDOCOMOMO Japanから2016年度の選定作品として選出されるなど、再評価の機運が高まっている。同庁舎は、日本建築学会近畿支部が2016年に保存活用要望書を提出している。

見学会では、主に近代建築部会主査である笠原が解説・案内を担当した。最初に宮津市庁舎を見学し、外観のみならず内部の執務室や階段室、市議会議事堂、屋上、地下室まで見学した。その後、徒歩圏内に建つ沖の建築作品、与謝医師会(1960年)と宮津武田病院(旧太田病院/1971年)も見学した。

見学会後は、宮津市福祉センターに移動して講演会および座談会を開催した。講演会では、最初に笠原が「建築家・沖種郎と宮津市庁舎」と題して講演した後、宮津市の東高志氏が「文化的景観の取組みと宮津市庁舎」と題して講演された。最後に、沖の大学での教え子でもある舞鶴市の矢谷明也氏に「沖種郎の思い出―近代建築保存活用の課題」と題して講演いただいた。その後、短時間ではあったが、座談会を開催し、宮津市庁舎の保存活用の可能性や難しさについて議論した。

今回は29名の応募があったが、当日は欠席者や当日参加者がおり26名が参加した。東京からも複数の参加者があり、関心の高さが感じられるものとなった。





宮津市庁舎

宮津市庁舎





講演会の様子

講演会の様子





宮津武田病院

与謝医師会館

[笠原一人/京都工芸繊維大学助教、日本建築学会近畿支部近代建築部会主査]

#### ●中国支部

# 瀬戸内建築まち歩き「風待ち、潮待ちの大崎下島御手洗地区 まち歩きツアー

呉市大崎下島の御手洗地区は、江戸時代から風待ち、潮待ちの港とされ、当時は人と情報が集まる要衝地であり、18世紀に入って急速に発展した。また「御手洗(みたらい)」という地名の起こりは、神功皇后や菅原道真公に由来するとも言われている。1994年に国の「重要伝統的建造物群保存地区」として指定され、保存や観光など注目を浴びている。

本年度の建築文化週間のまち歩きツアーは、この「呉市御手洗地区」を現地ガイドともに巡りながら町並みを楽しむツアーを10月29日(日)に実施した。当日は、台風直撃という最悪のコンディションであったが、現地に赴くまでの風雨からは考えられないような静穏な海域に面する御手洗地区であった。参加者20名は御手洗地区に到着後、観光協会にて御手洗の歴史、町並みの特徴などの説明をうけ、2グループに分かれて散策した。

江戸時代に広島藩から免許をもらった御茶屋である若胡子屋は、屋久杉など上質な建材で作られ、花町御手洗の隆盛を極めた建造物であり、近年は耐震改修後、公民館としての利用を経て展示施設として活用されていた。昭和初期のモダン劇場である乙女座は「花道」や「奈落」、2階部分には「桟敷席」が現存しており、古き良き時代「昭和」の雰囲気が十分に伝わる建造物で、今回のツアーでは特別に昼食会場として利用させていただき、参加者の多くは2階の桟敷席で食事をした。また、千砂子波止(石積みの波止場)や高燈籠といった江戸時代からの海洋土木建造物は御手洗のシンボルとして現在もランドマークとなっている。参加者からは訪問する機会が少なく、改めて御手洗地区の良さを再認識したとの回答があった。また、学生と一般参加者が同数程度で、親子ほど年齢の異なる学生とまち歩きツアーをしたことが貴重な体験であったとの意見もあった。





集合写真

御手洗地区の説明を聞きながら散策する参加者



古民家を散策する参加者

「川上善嗣/広島工業大学准教授]

#### ●四国支部

#### 「愛媛県庁本館竣工88周年記念建築文化シンポジウム」

愛媛県庁本館について、県からの委託により、昨年度に本会四国 支部が調査を実施した。また、今年度に竣工88周年を迎えたことから、 10月21日(土)に愛媛県庁本館にて見学会と愛媛県林業会館3階大 ホールにてシンポジウムが開催された。

参加者は、建築関係者や郷土史研究者などジャンルも幅広く、県内外の本会会員から一般県民まで83名の参加があった。この建物やこの時代の建築の人気を実感した次第である。

見学会は、班分けによりスタートする室を変えたことで、玄関ホール、 貴賓室、正庁、ドーム会議室という主要室を円滑に巡ることができた。 貴賓室や正庁を初めて観たという参加者が多く、優美な姿に感激した という感想をいただいた。

シンポジウムでは、石田潤一郎氏(京都工芸繊維大学教授)が庁舎 建築の系譜と愛媛県庁本館の特徴について、武知亜耶氏(住総研特 別研究員)が建築家・木子七郎について、峰岡秀和氏(愛媛県建築士 会文化財・まちづくり委員)が県庁本館の保存状況について、それぞれ紹 介し、曲田清維氏(愛媛大学名誉教授)の進行による討論などを通して、この建築が、郷愁を誘うだけではなく、両翼の突出などのバロック的な 要素も持ちながら、装飾を抑えたゼセッションなどの新しい考え方を取 り入れたものであることや内藤多仲による構造設計であり、中央の塔の 部分には、鉄骨鉄筋コンクリート造を採用するなど、当時の最新の耐 震構造であったことなどが紹介された。また、城山との関係など、まちの 景観についても考慮されていることなどから、今後も「愛媛県庁本館の 保存と活用」を推し進めることが大切であることを、本会関係者と県民 の皆さんとで再確認した。





[安藤雅人/愛媛県庁]

## ●九州支部

## 「クリークのまち"再発見"

今回九州支部では佐賀支所が担当し、地域の空間的な文脈と建築やまちとの関係性をテーマとすることとした。具体的には、佐賀平野に発達したクリーク網の成り立ちや役割、居住環境や建築との関係、生き物の生息環境、さらにはクリークに着目した新たなまちづくり活動などを概観することにより、まちの中のクリークの価値を再発見し、建築や都市を考える機会として企画した。

## ○シンポジウム「クリークのまち"再発見"」

佐賀市歴史民俗館・旧古賀銀行において10月7日(土)に開催されたシンポジウムは、一般市民からの参加を含め44名の参加があった。冒頭、清水耕一郎佐賀支所長から本企画の背景などの説明があり、後藤隆太郎氏(佐賀大学准教授)の主旨説明のあとに招聘した建築関連分野3名から講演をいただいた。まず、於保泰正氏(元建設コンサルタント代表)より、「クリークの機能と風景」としてクリークの複合的

かつエコロジカルな機能を20の視点から分かりやすく解説された。農業の近代化によって失われつつある機能もあるが、今日でもその片鱗を見ることができる。続いて、徳田誠氏(佐賀大学農学部准教授)から「クリークの生物多様性」として、淡水魚、トンボなどの独自の生態的調査の結果から、クリークは絶滅危惧種の宝庫といえるほどに貴重であり、まちやそれに近接してある生物多様性の面で極めて重要であることを伺った一方で、農業水路整備の前後では個体数が大きく変化する実態も指摘された。最後に、「『地形』へのアプローチ」と題して、石川初氏(慶應義塾大学大学院教授)から現代の地理情報や分析技術を活用した画像の明示、地形の新しい見方を紹介いただいた。江戸・東京で得られた知見である尾根上の用水と谷筋の下水による空間利用の関係などは、すこぶる平坦な佐賀においても基本原理は同じ、その可視化は可能である。また、低平地では人々の生活と水が近しく、カジュアルに関係していること、それがどこまでも水平的に連続することが大きな特徴であるとの指摘があった。

後半のディスカッションでは、冒頭に小島昌一氏(佐賀大学教授)か ら市街地のクリークの温熱環境やその特性について話題提供をいた だいた。その後、講演者らによるディスカッションを行い、会場からの質 疑を含み、上述の内容についてさらに理解を深め、クリークの価値や その本質について主に次のような視点が議論された。クリークの多様 な機能を踏まえて継承することは、結果として防災に通じ、風土や環境 と関わった空間文化の醸成に通じる。近代化の中でクリークの機能は 変化しているが、今日でも春と秋に市民総出による川掃除が継続され ていることは他の地域にはない特徴であり、クリークは人々の生活と深く 関わった存在である。クリークには生物多様性があり、特にコンクリー ト護岸の成されていないクリークは貴重である。たとえば「屋根のない 水族館、あるいはまちの動植物園」としてクリークのまちをPRできるので はないか。さらに、佐賀のような低平地のみならず、被災時などでは地 域全体を包括するシステムは機能しない場合があり、部分での判断、 部分ごとに自立的に改善することが重要になる。クリーク網の維持管 理などにおいて、人々が地区単位などで関与できているならば、そうし た部分関与の余地を残すことは重要であり、その集積として全体が強 靱化できる1つのモデルともなりうるのではないか。以上のように、建築 関連分野からの新鮮かつ複層的な見方や知見の提示があり有意義 であった。

なお、今回の企画では、まちづくり団体さがクリークネット(代表:川崎康広氏)の協力により、和船とカヤックで川下りをする「まちなかクリーク体験会」を10月7日(土)~8日(日)に実施いただき、シンポジウムと合わせて「クリークのまち」に触れる機会を提供できた。

## ○見学会「クリークのまち 建築探訪 |

シンポジウム「クリークのまち"再発見"」の関連イベントとして、建築探訪ツアーを11月28日(土)に開催した。主催は、日本建築学会九州支部佐賀支所と佐賀大学工学系研究科都市工学専攻であり、低平地研究会の後援をいただき、近県や一般を含む19名の参加があった。

一行は、佐賀駅に集合しマイクロバスで佐賀の上流部にある「さが水ものがたり館」にて、荒牧軍治氏(さが水ものがたり館館長)から佐賀平野の水路網の歴史やシステムの解説受け、佐賀城下への取水施設(石井樋)を見学した。次に佐賀市内へ移動し、三島伸雄氏(佐賀大学准教授)の解説のもと「佐賀県歯科医師会館」(設計:坂本一成/アトリエ・アンド・アイ代表)を見学した。その後、佐賀城の濠に面する「清恵

庵」(設計:堀口捨己)の見学と清恵庵周辺の佐賀城公園や佐賀県立 博物館にて昼食や休憩をかねて滞在した。

午後は、近現代建築の外観を見ながらクリークのまち歩きを行った。城濠沿いの戦後近代建築、今も現役の公共施設である「佐賀県立図書館」(設計:第一工房+内田祥哉)、「市村記念体育館」(設計:坂倉準三建築研究所)を見学し、さらに城内から城下町の旧町人地へと移動し「松原神社の楠木群や松原川周辺の水辺」、「深川製磁・佐賀店」、「まちのコンテナ」、「とりい」、「マチノシゴトバ」など、良質な建築や近年のまちづくりの実践場所などを視察した。最後に、水路際に建つ「佐星醤油」にてご当主の徳村氏の説明とともに、近年に改修された商家の佇まいを見学した。これらの体験を通して、クリークのまちの構成を理解しつつ、そこに在るそれぞれの建築や営みから多くを学ぶことのできた見学会となった。





シンポジウムの様子

まちなかクリーク体験会



建築探訪(佐賀県歯科医師会館にて)

[後藤隆太郎、中大窪千晶、渕上貴由樹/日本建築学会九州支部佐賀支所]